丹羽文雄「現代史」の一考察

水川布美子

はじめに

丹羽文雄は、六十余年に亘る創作活動の中で数多くの作品を発表し、後輩の育成にも力を入れた。彼の作品では、「肉親もの」と呼ばれ、母を描いた「鮎」「贅肉」や、父を描いた「青麦」「菩提樹」、義祖母を描いた「厭がらせの年齢」、祖母を描いた「無慚無愧」等が有名である。また「マダムもの」或いは風俗小説と呼ばれるジャンルや、「海戦」「還らぬ中隊」等の「戦記もの」も広く読まれ、「本願寺史もの」と言える長篇小説「親鸞」「蓮如」は、親鸞聖人七五〇年遠忌の二〇一一年に注目を集めた。

その丹羽文雄が、戦中から戦後の一時期、歴史小説を手掛けている。その契機は「近頃現代風俗ものが、書きにくくなつてゐた。」（『告白』[1]）とあるように、『中年』の発禁処分や、それを取り巻く時局に鑑みての措置だったと想像されるが、終戦後も彼は歴史小説を書き続けている。

「現代史」は、「勤王届出」に次ぐ歴史小説で、森恪をモデルとした毛利恪を中心に、主として大正時代の政治社会を描いた物語である。大正九年、小山宗作が上海の喜田川毅に帰国を要請するため、トロール船に乗り込むところから始まり、三井物産社員時代の毛利の話を盛り込みながら、一方で入江逸平という人物を通して、思想界の動きも随所で描かれる。創生社版『現代史』の前篇では、毛利が落選するまでを、後篇では昭和に入り、外務政務次官、内閣書記官長時代から死に至るまでを追っている。「千枚の豫定[2]」で起稿し、幾度も改稿を重ね、遂に完成しなかった作品であるが、丹羽がそこに何を描こうとしたか、その情熱の根源を探りたい。

一　発表と異同について

版を重ねる毎に改稿を加えるのが、丹羽の特徴であるが、「現

代史」は特に複雑な発表形態を持つ。昭和十七年、『改造』の四、六、八～十月号に発表された後、それらをまとめて昭和十九年一月に改造社版『現代史 第一篇―運命の配役』を刊行、さらに「政治の雰圍氣」（『新小説』）「力の信者」（『時局情報』）「巻紙と暗殺」（『文明』）を全て昭和二十一年二月号に発表した。なお、「對人間」が『思潮』の同年同月号に掲載予定であったが、全文削除された[3]。後、「まへがき」を付し、前・後篇から成る創生社版『現代史』（昭和二十一年五月二十五日）が刊行される。さらに昭和二十二年、「小説 最初の頁―現代史抄―」が『大和』十一月号に発表されるが一回で終わり、その後、昭和二十四年、『歴史小説』六～八月号に「序章―改稿現代史―」が掲載されたが、雑誌の廃刊に伴い未完に終わる。収録された内容を整理すると、次の表のようになる。

「改造」昭17（号）	「改造」昭17	改造社版 昭19	各雑誌 昭21・2	創生社版 昭21・5（篇）	創生社版 昭21・5	「大和」昭22・11	「歴史小説」昭24（号）	「歴史小説」昭24
五月号	×	×			まへがき	×		×
	壹	序章		前篇	第一章 海を渡る 一		六月号	（一）
	○	○			二			（二）
	貳	壹			第二章 諜報機関 一		七月号	（三）一部
	参	貳			二	一（一部）		×
	○	●			三	×		×
	四	参			四			×
六月号	伍	肆			第三章 北一穀かへる 一	×	七月号	（三）・八月号
	陸	伍			×		八月号	×
	○	●			二			○
	○	陸			三			
	漆	●			第四章 挿話 一			
	○	●			二			
八月号	捌	漆			×	二		
	○	●			×	×		
九月号	玖	捌			×			
	○	●			×			
	○	●			×			
十月号	拾	×			×			
	○	玖			第五章 自分の巣 一			
	○	●			×			
	○	●			二			
	○	●			×			
	拾壹	拾			第六章 落選まで 一			
	○	●			二			
	拾貳	拾壹			三	三		
	○	×			×	×		
	×	拾貳			四	四		
		●			五	×		
		×	政治の雰囲気	後篇	第一章 政治の雰囲気			
			力の信者		第二章 力の信者			
			巻紙と暗殺		第三章 巻紙と暗殺			
			（對人間）					

○…○印で区切られた節
●…行間で区切られた節
×…該当箇所無し

収録された章が、発表毎に異なっているのみならず、同じ内容でも多くの異同が見られる。例えば、最初に発表された「改造」の一頁目だけでも、「少しつよい風が吹いたならば」以降、十六行分が、改造社版『現代史』では削除されている。細かい表現の改変（初出「時をきざんだ。」改造社版「時をきざんでゐた。」同一頁）等は枚挙に遑が無く、「改造」の「壹」だけで実に二六四箇所に及ぶ改変が見られる。

さて、改造社版と創生社版を比べると、創生社版は「まへがき」と後篇の三章が加えられる一方、改造社版からは大きく内容が削除されている。削除されたのは、毛利が遠衛武麿と出会い、憲法研究会を開くまでの話題、入江が妹と面会する場面、毛利と喜田川が面会する場面、加藤友三郎亡き後の混乱などである。毛利と喜田川が面会し、同じく中国に日本の将来を考えている二人が、実は全く性質の異なった見解を持っていることが明かされる場面が削除されているので、創生社版の後篇で、森と北が接触している場面では、二人の出会いが唐突に感じられる。

「大和」に発表された「小説　最初の頁―現代史抄―」は、恐らくは架空の諜報員、入江逸平を木見仙介と改め、彼を中心に抄録されている。毛利恪は加久木謙太として登場するが、あくまで中心は木見である。作品末尾の「作者より」に、

――かつて私は「現代史」を書いた。政治小説としての材料の消化が不十分であり、他日稿を改めて是非ものにしたいと考へてゐた。幸ひ「大和」より話があつたので、かねての希望の政治小説を本格的に始めることにした。（略）

と記している。また、「編集後記」には、その意気込みを高く評価した上で、「尚、この現代史抄は一号乃至二号おきに、引続き本誌上に連載の予定である」と記されているが、この後二号を発行して「大和」は廃刊となる。

「歴史小説」は丹羽が編集同人の雑誌である。「序章―改稿現代史―」が連載される前月号で、丹羽は「一つの夢」を発表し、「『現代史』といふ小説が、私の頭にひつかかつてゐる。書き直したいからだ。」と記している。今度の改稿は「最初の頁」と同じく、入江（木見ではない）を中心に据え、北一輝や大川周明の周辺を描いているが、人名に統一性がなく、北は「喜田川毅」「北一毅」「北一輝」と表記されている。

人名に関して、「改造」、改造社版『現代史』、各雑誌に発表された後篇三作、「最初の頁」、及び「歴史小説」六月号の主要人物は、架空名表記となっている。但し、山県有朋や犬養毅など登場人物の約半数は実名表記されている。架空名でも、満田鶴次郎（満川亀太郎）、鳥山伍郎（鳩山一郎）のように、実名を想像できる名が付けられている。実名と架空名の使い分けの基準は不明であり、少なくとも存命か否かの措置ではない。

創生社版『現代史』と、「歴史小説」の七月号、八月号掲載分は、全て実名表記になっている。これについて、創生社版『現代史』の「まへがき」に〈「現代史」には戦争犯罪者が多く登場する。この一冊にまとめるに際して、本名に書き代へた。〉とある。

戦後の作品発表と極東国際軍事裁判（東京裁判）を時系列で纏めると、以下のようになる。

昭和二十一年一月十九日　極東国際軍事裁判所条令が承認、裁判所が設置される。

二月　後篇三篇発表。

（「對人間」全文削除処分）

四月二十八日　A級戦犯容疑者の起訴状が発表される。

五月三日　開廷。

五月二十五日　創生社版『現代史』刊行。

二十三年十一月十二日　戦犯二十五被告に有罪判決。

十二月　七名、死刑執行、十九名、釈放発表。

二十四年六～八月　「序章―改稿現代史」発表。

各脱稿日は不明であるが、前記「まへがき」には「一九四六年五月」と記されており、戦犯容疑者の発表を受けて、実名表記に改められたことになる。戦犯容疑者に指名されたから、架空名に書き換えるのではなく、その逆なのである。ここに丹羽の心意気が感じられる。彼らが何をしてきたか。小説であり、作者の感性で捉えた人物像であっても、それらを正しく伝えたい、多くの人に知って欲しい、という思いが、実名表記に至った理由ではないだろうか。時は、戦勝国が敗戦国を一方的に裁くという裁判が始まったところである。結果は「敗戦」の一語に尽き、そこに至る政治的、軍事的、思想的な流れは、そしてその流れを作った一人ひとりの人間は、さらにその人間の内面は「敗戦」の中に没してしまう。戦勝国側への追従から、戦犯を断罪する意味ではなく、「生きた人間の姿」をありのままに描こうとしたのではないだろうか。後篇の執筆意図については後述する。

二　典拠について

前篇は森恪をモデルとする、毛利恪を中心に物語は展開する。森恪（明治十五年～昭和七年）は実業家・政治家で、三井物産上海支店勤務を経て、帰国後は孫文らの革命派を支援して借款供与や利権獲得に努めた。中国興行株式会社はじめ多くの会社を創立し、対中国投資、資源開発に手腕を発揮する。立憲政友会に入党、衆議院議員となった後は、田中義一内閣で外務政務次官となり山東出兵を推進、東方会議を主催した。満蒙第一主義の観点から関東軍と提携し強硬な満蒙分離政策を唱える等、一貫して中国侵略政策を推進した人物である。犬養内閣では内閣書記官長に就任している。

森恪について、当時刊行されていた書に、山浦貫一編『森恪』（森恪傳記編纂會　昭和十五年→普及版　昭和十六年七月二十五日）、山浦貫一『森恪は生きて居る』（高山書院　昭和十六年五月二十日）等がある。前者普及版は、「反響篇」が追加されており、後者は森恪篇・政治篇・旅行記篇・小説篇（「政治小説　失はれた政権」「政治小説　壊れた椅子」）から成る。結論から言

えば、丹羽は前者の初刊本または普及版を参照したと推察される。原典をどのように活用しているか、次にその例を挙げたい。

森さんが支店長になられた時には、三十二歳であつた。當時私は二十五歳で、年の割に主要な地位にゐた。ある時森さんが／「君は髭を生やさぬか」／といきなり奇妙なことをいひ出した。私はまだ若いし髭をはやさうとは考へたこともなかつた。すると／「何も伊達に髭をはやせといふのではない」／と髭の講釋を一席辯じて／「髭といふのは可成の大事な役割をするものだ。殊に君のやうな地位にゐて商賣上種々の人に接する場合には、むしろ大變効果的な働きをする。人にある威嚴を示し、信頼を與へる重寶なものだ。早速やつて見給へ」／そこで私は早速髭を伸した。毛のあまり濃い方ではなかつたので、一ヶ月ばかりたつたが薄い髭しか出來なかつた。／「これでいゝのでせうか」／といふと、森さんが／「うん、よろしい」／といはれた。爾來私は髭をはやすやうになつた。そして私は自分の髭を「森恪髭」と稱してゐる。

（普及版『森恪』一八六～七頁　―西永義文氏談―）

三十二歳で毛利恪は髭をはやしてゐた。榮養分がまんべんなく全身にゆき渡るので精神力な濃い髭であつた。二十五歳の社員をとらへて、／「君は何故髭をはやさないのか」／社員は笑つてしまつた。／「何も伊達に髭をはやせといふのではない」と毛利恪は嚴しく笑ひをおさへた。「髭といふものはかなり大事な役割をつとめるものだよ。ことに君のやうな年齡のわりに主要な地位にゐる者は、商賣上種々な人に接するとき、髭が思ひもよらぬ効果をあげるものだ。威嚴を示し、信頼をあたへる重寶な武器だよ。早速やつて見給へ」／一ヶ月經つて、若い社員が薄い髭を氣まり悪るげに示すと、毛利恪は、／「うん、よろしい」と言つた。

（改造社版『現代史』五一頁）

このように、一〇六五頁の大著から、事件や逸話を繋ぐ形で、毛利恪の人物像を描き出している。この場面でさらに興味深いのは、後に入江の感想が付されている点である。

髭の講釈も入江逸平は伝え聞いた。そして本当に毛利恪の正体に触れたと思った。食えぬ奴だと一応判ったつもりでゐたことが買いかぶりであったように思われた。豪傑肌だが、根は単純きわまる凡人だと思った。

と、人物評価を入江の視点で語っている。伝記資料である『森恪』を読んだ、作者自身の感想のように思われる。これに限らず、入江は作中で重要な位置を占めていると考えられるが、これについては次章で考察したい。

さて、典拠と推察される『森恪』には見られない話題も「現代史」には登場する。北一輝、大川周明を巡る逸話である。作品冒頭、小山宗作（大川周明）が上海の喜田川毅（北一輝）に会いに行く場面では、満田鶴次郎（満川亀太郎）の手紙を持参して行っ

たこと、友人（何盛三）が蔵書を売って、百円の旅費を得たこと、書きかけの『革新日本大綱』（『日本改造法案大綱』）を預かって帰国したことなどは、事実と一致するが、相違点も見られる。大川周明の「北一輝君を憶ふ。」を参照し、相違点をまとめると次のようになる。

	『現代史』	大川周明「北一輝君を憶ふ」
乗船	大正九年九月	大正八年八月十六日
船	六七〇噸のトロール船	天光丸（鉄道枕木運搬船）
海	おだやかな海上風景	稀有の暴風雨
行先	上海	漢口（機関故障で上海に寄港）
北の居場所	呉淞路の安藤医院	有恒路の長田医院 →仏租界へ移転済み
面会場所	安藤医院の二階	長田医院で面会後、
面会時間	数時間（？）	太（天）陽館（旅館）へ 旅館で共に一泊、 翌日北の家でも語る
帰国要請	絶対安静・拒否	年末までに帰国すると約束、実行

このように、大川周明の回想とは異なる状況が描かれている。その他、森恪の女性関係、入江逸平の存在などが、虚構だと推察される。

三　入江逸平について

入江逸平は謎の多い人物である。「不愉快な男」「栄養不良」など、マイナスのイメージで登場する。日に三四十通の手紙が来る諜報員である（二・以下、改造社版の章を記す）。喜田川とは七八年の交際で、酒、煙草を飲まず、正確な情報を持っている（序）。帝国ホテル在住（一）であるが、後に神田の緑館へ移転、京橋三丁目の京三ビル（八では「銀三ビル」）に事務所を借りている（七）。大正三四年頃、毛利を知る（一）。学生時代、下宿で誰も相手にしなかった醜い女中にふられる逸話も語られる（十一）。

創生社版では削除されているが、四十三歳で独身、外語学校を卒業し、杭州の領事館に奉職した経験ある。表向きは「東洋文化研究所」所員で、妹は川北政朔の妻、川北つる子である（七）。なお、発表されなかった「對人間」では、三井の理事長から金を貰い、山県有朋の依頼で諜報活動をした後、団琢磨に情報提供していたことが語られる。これで、入江の幅広い諜報活動の資金元と、元の依頼主の謎が解けるのだが、全文削除されたので、当時の読者はこれを知らない。

入江の情報量は豊富で、例えば、

（略）豊富な毛利に關する智識は突風に似てゐた。相手の穿

入に伊勢は氣押された。三十五歳からはじめた毛利恪の俳句や乘馬の趣味にいたるまで知りつくしてゐる入江逸平とはいかなる人間か、まるで謎であつた。（略）入江逸平も毛利に關する豐かな智識に自分が壓倒されて、口から出まかせに毛利のことを喋つてゐるやうに見えた。そして口から出まかせの話しが一つ一つ伊勢益良をびつくりさせてゐることには少しも氣がつかないやうであつた。

（改造社版『現代史』九二～三頁）

と表現されている。この入江を喜田川は

――氣味の悪い存在だが、結局あの男も思想か、時代か、何れかの隷屬的な存在にすぎないのではないか。／無視すれば、無視の笞の下にいくぢなく横たはる人間であり、氣味悪がれば、無限に不氣味な證據の引き出せる男であり、怖れれば、典型的な智腦犯のやうにさまざまな恐怖のベールをかむり怯やかす男であり、輕蔑で叩きつけたなら、一言の辯解も抗議もできずに輕蔑されつ放しになる人間であつた。

（改造社版『現代史』一二三頁）

と評し、毛利は

毛利恪には入江逸平の無慾さが理解できなかつた。入江は何故權力を持たうとしないのか。生ま身である以上は何故耳目の慾に捉へられないのか。尨大な緻密な複雜な諜報機關を擁し、原首相の遭難を半年も前から言ひあててゐながら、その豫言を單なる放言のやうに言ひすてて豫言の報酬はもとめず、豫言に乘つて器用に世間にのり出さうともしない大まかな神經が不可解であつた。

（改造社版『現代史』一五八頁）

と、自己の性格を基準とするゆえ、彼の理解に苦しむ。また、創生社版では削除された一節で、語り手は、

入江はこれまでに誰にも素性を明したことがなかつた。諜報蒐集といふ仕事の性質上本人が舞臺の脚光をあびてはならなかつた。常に舞臺の影にゐなければならない。影にゐることに慣れてしまふと暗黒のなかにぢつと坐つて、舞臺裏から觀客席と舞臺を眺めるだけに人生が限られてしまつたやうである。すると影にゐることの人間としての強味、脅迫じみた武器が逆に今度は入江逸平を支配するやうになつた。影でなければものの言へない人間になつた。影でなければ思考も許されず、感情の表白もその世界に限定されてしまつた。

（改造社版『現代史』二二五頁）

と分析する。

入江逸平は諜報員ということになっているが、仮にモデルがいたとしても、人物造型については創作であろうと推測される。毛利の家庭の内情や趣味は『森恪』に書かれている内容であり、それらを入江が情報として得ている、という設定になっている。喜田川の帰国や、毛利を驚かせた五・一五事件の予言は、歴史を知っていれば可能なことである。この恐らくは架空であろう人物を登場させることにより、毛利恪を追うだけでは伝わらない、思想

界の動きやそれに伴う政界の裏面を盛り込むことが出来、小説に奥行きが出来る。また、毛利と正反対の性格であることや、妹の前では素顔に戻るところなど、小説らしい面白さ、人間の悲喜劇も醸し出されている。先に挙げた「森恪髭」のように、作者自身の感慨を語ることにも利用されている。毛利だけでなく喜田川や小山を冷静に客観視する態度は、後代の人間が歴史を眺める視線に似るのではないだろうか。作者自身を投影したとまでは言えないが、歴史を知る者が、その過去と同時代に生きていたら、その時の現実をどのように見つめただろうか、ということが、入江を通じての人間洞察に現われていると考えられるのである。

四　同時代評

この作品は、当時の人にどのように受け取られたのであろうか。中村光夫[6]は、

百二十枚の長篇で作者の久しぶりの力作だといふことであるが、実にひどい小説で、読み終つてただ何とも云へず腹が立つただけであつた。（略）小説としての出来不出来なら第一小説として態をなしてゐない。（略）しかもこの出鱈目な小説を題して「現代史」とは何事であるか。文学の冒瀆であり、また歴史の冒瀆である。

と酷評した。これを受けて、大井廣介[7]は、

この小説の一回目は中村光夫にボロ糞にやつつけられた。（略）中光が喜田川毅といふ人物はわけがわからんと云へば北一輝を知らないといふ二重の意味になるが、しかし、あのやうな批評もまたやむを得ない隙だらけの冒險作で、（略）この國の文壇常識では奇怪至極な筈である。

と中村をやり返しながらも、作品の「隙」を認めている。赤木俊[8]は「相當に困難な題材」とした上で、

今度發表された分でも、すでに人物は、外側からの接近によつてのみ描かれて居り、行間には、この作者に似ぬ隙間風が吹き抜いてゐる。作者と森格はなにによつてつながれてゐるのだらうか。そのやうな文學的靱帯への再省が要るのではないか。風俗への傍觀だけでは、眞の客觀小説はうまれて來る筈がない。

と論じる。井上友一郎[9]は、「人間精神の生成について、ぢかに觸れてゐるやうで樂しかつた。」と感想を述べた上で、

この作は森恪の半生である。その面自さである。日本人でなければ面白くない作品である。しかも森恪の面白くない男には、面白くない作品である。小説といふものは、さういふ狭いところから匍ひ出していく面白さである。

と分析、さらに「きつと丹羽氏の作品中でもズバ抜けた面白いものになるであらう。」と期待を寄せる。内容ではなく、このような作品が発表されたことについて、次のような見解も見られる。

また、たとへば丹羽文雄氏が、「現代史」と題する作品を發表し初めた事實を見ても、内容は兎も角として、その題だけ

を見ても、文學が變らなければならない必要に迫られ、變らうとして藻掻いてゐることが、よくわかると思ふ。[10]

作品の評価は分かれているが、丹羽の作品群でも、或いは文壇全体としても、特殊な作品として位置づけられようとしていることが窺える。但し、これらは「改造」に連載開始された時のものである。後篇に関しては後述したい。

五　執筆意図と「歴史小説」の系譜

では、丹羽はなぜこのような「冒険作」を書いたのか。執筆当初の要因としては、最初に触れたように「現代風俗ものが、書きにくくなつてゐた」時局に対応しての措置であったと考えられる。ところが、その時勢が転変し、終戦を迎えて後、後篇が書き継がれる。創生社版『現代史』の「まへがき」に、以下のように記されている。

（略）前篇を「改造」誌に連載したのが、戦ひの初期であつたが、後篇は余儀なく筆を折らねばならなかつた。若しも日本が戦ひに勝つたとしたならば、「現代史」は永久にかかれなかつたであらう。否応なしに永遠に真実から眼を塞がれたことであらう。敗戦となり、私はまるで憑かれた人のやうに書くことを急いだ。（略）そのため前篇と後篇は觀察の上にも、感想の上にも違つた色調を取るやうになつた。時間的にもいちいち主人公を追つてゐられなかつた。

後篇三篇（及び削除された「對人間」）が、全て昭和二十一年二月号に発表されていることから、どれほど「急いだ」かが窺われる。前篇が森（毛利）の人物像を中心に描かれていたのに対し、後篇は森恪を据えながらも、政界と軍部の動静、張作霖爆死事件や満州事変など、日本及び中国の時局の流れを描いている点が「違つた色調」だといえる。

先に挙げたように、何も戦戦犯容疑者を、或いは既に亡き森恪を断罪しようとの立場から、後篇を書き急いだわけではないだろう。同じ「まへがき」に、丹羽は「戦争責任は単に過去や外側にある問題ばかりではなくして、現在の私達の心の内側の問題である。」とも記している。敗戦が丹羽を突き動かしたならば、そこにあったのは、反省や弁解であったと想像される。さらに言えば、戦勝国側の歴史観を植え付けられる前に、日本人としての「真実」を表したかったのではないだろうか。

秦昌弘氏[11]は「對人間」解説の中で「丹羽文雄としては、昨年の秋以来しばしば報道されるA級戦犯逮捕者を登場させ、話題性も持たせようとしたのであろう」と指摘されている。「話題性」を十分に備えた素材であったが、坂口安吾は、

だいたい、この小説の構成原理は、文学でなしに、ジャーナリズムの原理によつて成されてゐる。つまり、この小説は、人間が動きだすことによつてその内部的な又外部的な必然から、（或ひは偶然でも構はない）事件が生起し構成されてくるのでなしに、たゞノリとハサミと文章によつて歴史的事象

をつなぎ合せ組み合せた読物にすぎない。読物と文学をゴッチャにしてはいけない。[12]

と鋭く批判する。後篇は特に「読物」の印象が強くなっている。

この批判を受けてかどうか、丹羽は何度も改稿する。「一つの夢」（前出）では以下のように記す。

私はいまとてつもない希望を抱いてゐる。夢で終るかも知れないのだが、一大壁畫を描いてみたいと考へてゐる。「現代史」はその一部分にすぎない。今後私がいくつまで生きられるか知れないが、その大部分をこの壁畫を描くことに集中したいと望んでゐる。（略）題して「人間壁畫」現代史の壁畫を考へてゐる。（略）私の壁畫は、理論的に組み立てることは出來ない。あくまで日本人らしい、ことに私の生地であるところの感覺を先づ通して描く以外に方法はない。（略）

また、「日本敗れたり」の「作者の詞[13]」に、

私はかねてから「人間壁畫」といふ題名のもとに、尨大な小説を念願してゐる。「日本敗れたり」は、その中の一節に當る。前に「現代史」を書いたが、これも一節である。（略）二・二六や、軍政史、昭和電工事件など、書きたいことが一杯にひかへてゐる。先日書いた「現代史」は改作しなければならず、材料は蒐集しなければならず、とても私ひとりでは手がまはりかねる。

ともある。ここに至って、丹羽の描きたかったのが、ただ森恪の一生ではなく、壮大な構想の「人間壁畫」であったことが分かる。「日本敗れたり」は、昭和二十年、広島に原爆が投下されてから終戦に至るまでの、閣僚と軍部の動き、御前会議の模様などを小説にしたものである。二・二六事件のみを扱っているわけではないが、丹羽は「首相官邸[14]」を著している。「変転限りなき政争に覇者は変れど宮邸は静かに時代の推移を凝視めてゐる！」（初出目次）首相官邸の建築から、宮邸内で起こった二・二六事件、五・一五事件をはじめ、歴代総理の逸話などを守衛を語り手として、「官邸」の視線で追った小説である。「現代史」が森恪という人物を中心に描いた「人間壁畫」の一部であるならば、「日本敗れたり」は事件を中心に、「首相官邸」は「場」を中心に描いた「壁畫」であるといえる。様々な手法を模索しながらも、結果的に「壁畫」は完成しなかった。

丹羽は、これらの「人生壁画」を描きながら、他の作品も次々に生み出している。流行語にもなった「厭がらせの年齢」が発表されたのは昭和二十二年であり、同年には「理想の良人」も発表、「哭壁」の連載も始まっている。二十五年の「爬虫類」、二十七年の「蛇と鳩」「遮断機」、二十八年「禁猟区」「青麦」、三十年「菩提樹」「飢える魂」等も代表作として挙げられよう。むしろ、「人間壁畫」系の方が異色である。では、「人生壁画」計画はいつ潰えてしまったのだろうか。

おわりに

昭和三十一年、丹羽は次のように述べている。

生きてゐる人間を追究し、その人間を描きだすことに情熱をもつことは、結局目的を描くことだといふ考へ方であり、それだけでたくさんだと信じるやうになつた。私には、彼岸の目的がある。小説の上に單に人間を描くだけでなく、浄土眞宗の思想の具象化を小説によつて形成しようといふのである。[15]

「人間壁畫」の「とてつもない希望」は、多くの作品を生み出す間に「彼岸の目的」にとって変わられる。そして、こちらの系統の作品の方が有名になり、丹羽文学の主流となる。しかしそれ以前、丹羽は「せめて寺院育ちの私は、蓮如という傑物ととり組もうと着々準備をととのえている[16]」とも記している。「親鸞」の連載開始が昭和四十年、「蓮如」は四十八年である。「蓮如」はおろか、「親鸞」に取り組む十数年以前に、「蓮如」の準備を進めていたことが窺える。「人生壁画」の一部であると思われる「首相官邸」が発表される前年には、丹羽の頭の中に「蓮如」の構想が芽生えていたことになる。関心が政治経済から、より身近な宗教へと移っていったのは、自然のなりゆきかもしれない。そして丹羽は「人間壁畫」を、寺院の壁に描き始めることになった。「現代史」等で体得した史料の活用方法、その中の人間洞察、歴史への介入方法、作品の描き方などの執筆態度は、後の作品に活かされ、宗教小説・本願寺史ものへ昇華されたと考えられる。

---

①六興出版部　昭和二四年三月一五日　八一頁

②「[一覧]　丹羽文雄は何を考へてゐるか」（「現代文学」昭和一七年・六月号　四頁）

③四日市市立博物館編『文豪丹羽文雄　その人と文学』（平成一三年二月二二日）に奏昌弘氏の詳しい解説と共に収録されている。

④「歴史小説」昭和二四年五月号（三四～五頁）

⑤「新勢力」昭和三三年一一月号　二〇～三二頁。昭和二八年頃、北一輝『日本改造法案大綱』の復刊を計画した際、大川周明が執筆したもの。ゲラ刷の段階で印刷所が火災、未刊行。未発表のまま没後遺品整理の際に発見された。

⑥「都新聞」文芸時評　昭和一七年五月（引用は『中村光夫全集』第六巻　筑摩書房　昭和四七年　三八七～八頁に拠る）

⑦「丹羽文雄『現代史』（改造）」（「現代文学」昭和一七年七月号　八頁）

⑧「文藝時評―私の崩壊について―」（「現代文学」昭和一七年五月号　五一～二頁）

⑨「現代史」を讀む（「現代文学」昭和一七年五月号　六七～八頁）

⑩「文壇餘録」（「新潮」昭和一七年五月号　二〇頁）
⑪③解説に同じ。
⑫「通俗と変貌と」（「書評」昭和二二年一月号）引用は『坂口安吾全集』第四巻（筑摩書房　平成一〇年五月二二日）に拠る。
⑬「サロン」昭和二四年八月号　一五頁
⑭「オール読物」昭和二八年一二月一日
⑮「戦後の私（「文藝」昭和三一年一〇月号　四〇頁）
⑯「わが家の歴史」（朝日新聞　昭和二七年二月二日）